人文科教育研究　43　2016年　pp. 133－142

社会人として求められるコミュニケーション能力の育成をめざす国語科学習指導の在り方
―― グループで課題を解決するための話し合いの指導を通して ――

堀　　美智子

1．主題設定の理由

近年，21世紀型能力という言葉を耳にするようになった。これは知識だけでなく，問題解決能力や思考力，コミュニケーション能力といった能力の総称で，21世紀の知識基盤社会で求められる能力であり，学習指導要領にある「生きる力」につながる能力である。つまり，生徒のコミュニケーション能力を育成することは現代の教育課題の一つであるといえる。

また，コミュニケーション能力の育成については，経済産業界からの要請の声もある。例えば高校生が身近な地元企業に就職する際も，コミュニケーション能力の高い人材を求める声は大きい。また，高校生だけでなく大学生などに対しても高いコミュニケーション能力を求めているということを新聞などで目にすると，学生に対して，高いコミュニケーション能力を望んでいるといえる。

高等学校での国語教育においては，社会人として必要とされる国語の力を育成する役割があり，それに対して大きな責任がある。特に，卒業後すぐに就職する場合もあるので，生徒たちに対して社会人として求められるコミュニケーション能力を育成することはとても重要である。

本研究を実践するきっかけは，次のような出来事であった。本実践を行った学年が第１学年の時の国語総合の授業で，「リテラチャーサークル」という本を読んで話し合う学習を行ったところ，生徒たちの話し合い活動に課題があると気づいた。「リテラチャーサークル」はそれぞれが役割を決めて１冊の本についてグループで話し合いながら読み進めていくのだが，例えば，役割分担を決める際に，リーダーの生徒に任せきりにしてしまったり，主体的に話し合うのではなくリーダーに反対しないことが最善であると考えているような行動をとったりする生徒や，自分の感想を述べる時でも声の大きい生徒に合わせてしまい，自分の感じたことや考えたことをはっきり言えない生徒が，どのクラスにも少なからずいた。これでは，適切に話し合いが行われているとは言えない。

この実践を行った第３学年では，第１学年の時よりもコミュニケーションの取り方がスムーズになってはいるが，まだ課題があると考えた。そして，その課題は本人たちも感じており，コミュニケーション能力に自信が持てない生徒は少なくなかった。また，コミュニケーション能力に自信のある生徒も，大きな声で挨拶することがすなわちコミュニケーション能力であると考えていることが多く，それが求められるコミュニケーション能力の全てではないことにすぐに気づく

ことは難しいのが現状であった。

そこで，第３年生の全５クラスの生徒（168人）にコミュニケーションに関するアンケート調査を行い，放課後も含めた高校生活のどういった場面でコミュニケーション能力が養われたかということを聞いてみると，インターンシップやデュアルシステム[1]，コミュニケーション講話[2]，就職の面接練習などを含めた授業に関連することでコミュニケーション能力が養われたという生徒は8.3％であった。また，「コミュニケーション能力が養われていない・わからない」と答えた生徒が13.1％であり，その他の生徒は学校生活の友人や教員との会話や部活動，文化祭などの学校行事，アルバイトなどでコミュニケーション能力が養われたと答えている。この結果から，多くの生徒は授業に関連することでコミュニケーション能力が高められたとは感じていないということがわかった。

以上のことから，コミュニケーション能力に苦手意識がある生徒の数は多いにもかかわらず，授業でコミュニケーション能力を高めることが十分できておらず，これは大きな課題であると考えた。そこで社会人として求められるコミュニケーション能力の一つである，課題の解決に向けて建設的な話し合いができるように指導をすることにした。

本研究では，課題解決に向けた話し合いとはどういう手順が必要であるかについて段階を踏んで学ぶことによって，生徒が卒業後に課題に直面したときも周囲の人々とコミュニケーションをとりながら協力し，課題を解決できることを目的とした。

そして，コミュニケーション能力が育成されることで，自信を持って社会の一員としての役割を果たしてほしいという考えから，このような主題を設定した。

２．研究のねらい

課題解決に向けた話し合いはどのような手順で進められていくべきであるかということを学び，実際に話し合いによって課題が解決したことを生徒が実感できるような指導を工夫する。

具体的には，あらかじめ設定された課題を解決するために必要な手段を各自が考え，その意見を持ち寄って話し合うことで，より適切な手段や方法を見つけていく。そして，話し合いに臨む準備から話し合いが終わるまでの道筋を段階ごとに学ぶことで生徒の気づきを促し，話し合いについての理解を深め，生徒が話し合いに自信を持つことができるように指導をし，社会人として求められるコミュニケーション能力を育成する学習指導方法を追究する。

３．研究の仮説

自分の考えや集団の考えを発展させるような建設的な話し合いを行うために，まず，このような話し合いがなぜ必要で，どのようにすると良いのかということを生徒自身が理解する。すると，自分の考えや集団の考えを発展させることができるようなコミュニケーション能力を学ぶ素地ができると考える。その上で，実際に話し合いをすることによって，適切なコミュニケーション能力を育成することができると考える。そして，学習の振り返りをすることで，次の課題が明確に

なり，そこに良い学びの循環がおこると考える。

4．研究の内容

（1）基本的な考え方

高等学校学習指導要領解説国語編（平成22年６月）(以下「解説」という。）国語総合の「話すこと・聞くこと」の内容（２）ウ「反論を想定して発言したり疑問点を質問したりしながら，課題に応じた話し合いや討論を行うこと。」において，「建設的な話し合いを行い，考え方がまとまっていない事柄について合意を図り，課題解決に向けてのよりよい方向性を見いだすことにつながる。」と述べられている。

また，課題解決に向けた話し合いができるということは，経済産業省が提唱する社会人基礎力があるということにもつながると考える。社会人基礎力とは，平成18年2月，経済産業省の産学の有識者による委員会で「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」を３つの能力（12の能力要素）から成ると定義づけたものである。

（2）主題に迫るために

ア　実態調査

研究実施クラスは，在籍39名（男子38名・女子１名）であり，３年間国語を担当してきた。ややおとなしい印象のクラスであるが，話し合いや発表の授業も，前向きに取り組むことができる生徒たちである。

今回の授業に先立ってコミュニケーション能力に関するアンケート調査をしたところ，「コミュニケーション能力に自信がある」と答えた生徒は33.3％であった。その理由は「他の人に話しかけるのが苦痛ではない」「自分の意見を言うことができる」「友達が多い」「部活動やアルバイトで鍛えられた」という回答であった。一方，約66％のコミュニケーション能力に自信がない生徒たちに，なぜそう思うのかを質問したところ，「初めての人とうまく話ができない」「人見知り」「声が小さいので無視されることが多い」などの回答があった。以上のことから，過半数以上の生徒がコミュニケーション能力に苦手意識を抱いているといえる。

また，社会人として求められるコミュニケーション能力とは何かということを質問すると，多くの生徒が「知らない人と話ができること」をコミュニケーション能力だと捉えていることがわかった。そして，社会に出てから求められるコミュニケーション能力も「知らない人と話ができること」と考えている生徒は多く，中には「お世辞を言うこと」や「上司の機嫌をとること」が社会に出てから求められるコミュニケーション能力だと思っている生徒もいた。

確かに，「知らない人と話ができること」も大切なコミュニケーション能力の１つであると思うが，社会人として求められるコミュニケーション能力はこれだけではない。例えば，問題の解決に向けてお互いが建設的な意見を出し合って話し合うことができる能力も求められるだろう。しかし，多くの生徒の実態は，前述の通りであり，例えば知らない人と出会って大きい声で挨拶を

し，元気に話すことができることが重要なコミュニケーション能力であると考えているといえるだろう。

以上のことから，生徒はコミュニケーション能力に自信がなく，社会に出てからどのようなコミュニケーション能力が必要になるのかを正しく理解できていないという実態が浮かび上がった。

イ　指導上の重要な手立て

前述のように，生徒は社会に出てから求められるコミュニケーション能力とはどういうものかということがうまくイメージできず，コミュニケーション能力のある一面しか捉えられていないということがわかったので，まずは社会に出てからどのようなコミュニケーションが求められるかということを正しく理解することが必要であると考えた。そのためには，社会に出てから求められるコミュニケーション能力のモデルが必要であると考え，１つのモデルとして経済産業省が提唱している「社会人基礎力」を提示し，社会人として求められるコミュニケーション能力とは何かを考えることにした。

また，課題解決のための建設的な話し合いにふさわしいモデルとして『トヨタの問題解決』も提示する。本校は工業高校であり，ものつくりに関心が高い生徒が多い。そのため，話し合いのモデルとして生徒たちにより身近に感じてもらい，興味や関心を喚起したいと考え，もう一つのモデルとして教材に選んだ。従って，生徒たちは前述の「社会人基礎力」に加えてこのモデルについても学び，社会人として求められるコミュニケーション能力について考えることとした。

そして，自分たちで考えた課題解決のために必要とされるコミュニケーション能力を意識しながら実際に課題を解決した後、生徒自身が自分のコミュニケーション能力について自己評価をする。

具体的には，４人１組でグループを作り，課題解決のために求められるコミュニケーション能力とはどういうものかを話し合う。そして，あらかじめ設定しておいた課題について話し合いをしながら解決し，話し合う前と話し合いの後での変化を振り返ることで，課題解決のためのよりよい話し合いのあり方や社会人として求められるコミュニケーション能力について学ぶ。

ウ　分析の方法

ワークシートを利用し，自分の考えやグループで話し合ったことを記録してもらい，それを分析する。また，授業中の様子を観察し，分析する。

（３）授業実践

ア　単元・教材・題材について

大修館書店「新現代文　改訂版」（平成19年度検定・平成24年度発行）の単元「伝統と文化」の評論教材である「折り紙の夢」を読解した後に，のりもはさみも使わずに正四面体（正三角錐）を作るという課題に取り組み，コミュニケーション能力を育成する。

イ　指導の実際

<table>
<tr><td colspan="4">第３学年情報科　国語科学習指導案
平成26年12月18日(木)　第６校時　　指導者　本論文執筆者</td></tr>
<tr><td>育成する
国語の能力</td><td colspan="3">課題を解決するために話し合う力</td></tr>
<tr><td>単元名</td><td colspan="3">グループで話し合いながら課題を解決し，話し合いの仕方を学ぶ</td></tr>
<tr><td>単元目標</td><td colspan="3">○課題を解決したり考えを深めたりするために，相手の立場や考え方を尊重し，表現の仕方や進行の仕方を工夫して話し合おうとしている。（関心・意欲・態度）
○課題を解決したり考えを深めたりするために，相手の立場や考え方を尊重し，表現の仕方や進行の仕方を工夫して話し合う。（話す・聞く能力）
○言語文化及び言葉の特徴などの理解を深め，知識を身に付けている。（知識・理解）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">単元の
評価基準</td><td>関心・意欲・態度</td><td>話す・聞く能力</td><td>知識・理解</td></tr>
<tr><td>○課題を解決したり考えを深めたりするために，相手の立場や考えを尊重しようとしている。</td><td>○課題を解決したり考えを深めたりするために，相手の立場や考えを尊重している。</td><td>○言語文化及び言葉の特徴などの理解を深め，知識を身に付けている。
○課題解決のための話し合いの仕方を理解する。</td></tr>
<tr><td>取り上げる
言語活動</td><td colspan="3">反論を想定して発言したり疑問点を質問したりしながら，課題に応じた話し合いや討論などを行うこと。（「Ａ話すこと・聞くこと」（２）のウ）</td></tr>
<tr><td>題材（教材）</td><td colspan="3">○「折り紙の夢」
○のりもはさみも使わないで，正四面体（正三角錐）を作る。</td></tr>
<tr><td>単元（教材）
について</td><td colspan="3">(1) 生徒観：コミュニケーション能力に自信がない生徒や，コミュニケーション能力とはどういうことかということをまだ理解していない生徒が多い。
(2) 教材観：卒業後はものつくりの現場で働く生徒が多いので，興味を持って取り組むことができる。また，協力して一つのものを作るという実の場に近い環境で学ぶことにより，実際に社会人として求められるコミュニケーションを取りながら，自分の取るべき行動を身につけることができる。
(3) 指導観：課題解決のための話し合いの指導を通して，実際に社会に出てから求められるコミュニケーション能力についての生徒の理解を深める。また，ものつくりの現場に出る前の練習の場として，生徒一人一人が課題を見つけることができるように心がける。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">指導計画
（学習計画）</td><td colspan="2">主な学習活動</td><td>主な評価</td></tr>
<tr><td colspan="2">第１次（４時間）
○評論「折り紙の夢」を読み，日本人の文化と創造力について理解する。
第２次（３時間）
○課題解決のために必要なコミュニケーション能力についてグループで話し合い，社会人として求められるコミュニケーション能力とは何かを理解する。
○のりもはさみも使わずに，正四面体（正三角錐）を作るという課題を，グループで話し合いをしながら解決する。</td><td>○文章に現れたものの見方，感じ方，考え方を読み取り，人間，社会，自然などについて考察し，理解している。（読む能力）
○課題を解決したり考えを深めたりするために，相手の立場や考えを尊重しようとしている。（話す・聞く能力）
○課題を解決したり考えを深めたりするために，相手の立場や考えを尊重し，表現の仕方や進行の仕方を工夫して話し合っている。（話す・聞く能力）
○課題の解決のために求められるコミュニケーション能力とは何かを正しく理解している。（知識・理解）</td></tr>
</table>

本　時　案　（第５時）		
本時の目標	○課題解決のために必要なコミュニケーション能力とは何かということについてグループで話し合う。（話す・聞く能力） ○社会人として求められるコミュニケーション能力とは何かを理解することができる。（知識・理解）	
学習活動	指導上の配慮事項など	評価・方法など
1　社会人として求められる課題解決のためのコミュニケーション能力とは何かについて考える。	○考える手がかりとして，経済産業省が提唱している「社会人基礎力」と「トヨタの問題解決」の抜粋を提示し，望ましいコミュニケーション能力のモデルを示す。 ○ワークシートを用意し，すぐに書き込むことができるようにする。	○社会人として求められるコミュニケーション能力について考えている。〈観察，ワークシート〉（知識・理解）
課題解決のための望ましい話し合いの仕方を考える。		
2　４人１組でグループを作り，課題解決のためのコミュニケーション能力について話し合って，意見をまとめる。	○それぞれの意見を尊重しながら，より望ましい意見を考え，グループで１つの意見をまとめる。	○社会人として求められるコミュニケーション能力について考えている。〈観察，ワークシート〉（知識・理解）
3　各グループの意見を発表する。	○全てのグループの意見を板書し，クラス全体で共有する。	○課題解決のために必要なコミュニケーション能力とは何かということについて，グループで話し合う。〈観察〉（話す・聞く能力）
4　各グループの意見を比較しながら，クラス全体で課題解決のためのコミュニケーション能力について考える。	○各グループの意見で共通しているものを指摘し，課題解決のためのコミュニケーション能力の共通理解を図る。	○目的や場に応じて，効果的に話している。〈観察〉 ○目的や場に応じて，効果的に聞き取っている。〈観察〉（話す・聞く能力）
5　課題解決のためのコミュニケーション能力を意識して，積極的に話し合いをしながら課題を解決する。	○のりもはさみも使わずに，正四面体（正三角錐）を作るという課題を示す。 ○課題解決のためにどのように話し合っていくかという点について，各グループで目標を立ててから始めるように指示する。 ○インターネットや書籍などの参考資料は使わない。 ○早く正四面体（正三角錐）ができたグループは，自分たちがどのように正四面体（正三角錐）を作ったのか，クラス全体にプレゼンテーションを行って作り方をクラスで共有するための説明の仕方を考える。 ○正四面体（正三角錐）の作り方の説明も考えたグループは，のりもはさみも使わずに正六面体（正四角柱）を作るように指示する。	○社会人として求められるコミュニケーション能力とは何かを正しく理解することができる。〈観察〉（知識・理解） ○課題を解決したり考えを深めたりするために，相手の立場や考えを尊重し，表現の仕方や進行の仕方を工夫して話し合っている。〈観察〉（話す・聞く能力）

（4）分析と考察

この単元は研究実施クラスの所属する第３学年の全５クラスの生徒たちに実践した。

まず，生徒はトヨタの問題解決の手順（『トヨタの問題解決』P. 62～66）や社会人基礎力（経済産業省 HP）について学んだ。その後，課題解決のために求められるコミュニケーション能力について自分の考えを書くように指示したが，何も書けない生徒はいなかった。そして，それぞれの意見を持ち寄ってグループで話し合うと，研究実施クラスのみならず，単元の指導をしたどのクラス（全５クラス）でも「課題（問題）について理解すること」「相手の話をきちんと聞いて理解すること」「自分の意見を相手に伝えること」の３点が挙げられた。

５クラス全体をみてみると，クラスによって違いはあるが，前述の内容以外に「課題の解決に向けて努力する」「報告・連絡・相談」などの意見が付け加えられたりしていた。しかし，最初の３点が挙げられないクラスはなかった。このことから，研究前のアンケート結果と比較してみると，トヨタの問題解決の手順や社会人基礎力について学んだことで，課題解決のためのコミュニケーション能力とはどのようなことかということを理解したといえる。また，生徒がグループで話し合いをしている様子を観察したが，それぞれの意見を尊重しながら望ましいコミュニケーションの在り方について話し合うことができていて，補助を出す必要はなかった。そして，研究実施クラスの授業後の生徒の自己評価で「社会人として求められるコミュニケーション能力について理解できた」と答えた生徒は当日の出席者37名中33名であり，ほぼ90％の生徒が理解できたと答えている。

理解できなかった生徒の理由としては，「今回学んだことがコミュニケーション能力であることは理解できるが，これだけで社会人として求められるコミュニケーション能力が充分かどうかわからないから」と答えた生徒が２名，「実際にコミュニケーションがうまくとれなかったから」と答えた生徒が２名であり，「理解できなかった」と答えた生徒が，コミュニケーションについて理解することに対して前向きな意欲を示していることがわかった。以上のことから，社会人として望ましいコミュニケーション能力のモデルを示したことで，多くの生徒は社会人として求められるコミュニケーション能力がどういうものかということを理解することができたといえる。そして，次の課題である生徒一人ひとりが考えたり話し合ったりする活動を行う上で有効な道筋を示すことができたと考える。

また，のりもはさみも使わずに正四面体（正三角錐）を作るという課題は，生徒たちの興味を強く引き，生徒たちは真剣に話し合いながら課題の解決に向けて取り組んでいた。課題に取り組む前に，今回の授業の目的はコミュニケーションをとりながら課題を解決することであることを生徒に説明し，グループごとにどのようなコミュニケーションをとりながら課題を解決していくかという目標を立ててワークシートに記入するように指示した。そして，課題の解決に向けて活動している間も，あくまでも今回の授業はより適切なコミュニケーションのあり方について学ぶことが目的であることを伝え，課題を解決することがこの学習のもっとも大切な狙いではないことを何度か呼びかけた。そうすることによって，生徒たちは学習の目標を見失うことなく，課題

の解決に向けてコミュニケーションをとりながら活動することができた。また，各クラスとも，途中で正四面体（正三角錐）展開図を全員で確認し，展開図の外側の紙をどのように折り込んでいくかを考えるように呼びかけた。全５クラス中，この補助的な指導が必要なクラスばかりではなかったが，研究実施クラスで補助的な説明を簡単に行った。

話し合いの活動の際は，Ａ４の用紙を１人１枚ずつ手にし，各自が試行錯誤を繰り返して紙を折り込み，実際に形を作ってみて，不具合が生じたときにはお互いに手を止めて話し合いを重ね，修正しながら作成する作業を，グループごとに繰り返した。すると，指導者も課題である正四面体（正三角錐）の作り方の模範解答（Ａ４用紙で作る正三角錐〈正四面体〉折り紙）を用意していたが，それとは違う方法が４パターンも生徒の取り組みの成果として出てきたことは嬉しい驚きであった。これは真剣に生徒たちが課題に取り組んだ証である。その一方で，単元を実施した全５クラスとも時間内に課題を解決できないグループ[3]もあった。しかしこれは，話し合いの成果の影響というよりも，立体を造形するための予備知識が不足し，完成形がイメージできないことの影響が大きいのではないかと考える。

また，正四面体（正三角錐）が予定の時間よりも早くできてしまったので，のりもはさみも使わずに立方体を作る課題（Ａ４用紙で作る立方体折り紙）に取り組んだクラスが全５クラス中１クラスあった（研究実施クラスではない）。このことも課題の解決に意欲を持って積極的に取り組んだことを示していると考えられる。

授業後の自己評価で，「コミュニケーションをとることができた」と答えた生徒は研究実施クラスの当日出席者37名中18名（約49％）であり，そのうちの16名は社会人として求められるコミュニケーション能力について「理解した」と答えている。その主な理由としては「課題の解決に向けて積極的にお互いの意見を交換することができたから」というものであった。残りの２名は「今回学んだことがコミュニケーション能力であることは理解できるが，これだけで社会人として求められるコミュニケーション能力が充分かどうかわからないから理解できなかった」と答えた生徒であった。一方，「コミュニケーションをとることができなかったと答えた19名の内の約半数の９名が「話し合いはできたが普段とあまり変わった感じがしなかったから，コミュニケーションをとることができたと実感できない」と答えていた。残りの10名は主に「課題に集中して話せなかったから」「１回の授業だけでは実感できなかったから」という理由を挙げていた。以上のことから，約73％の生徒が話し合い活動はできており，今後さらにコミュニケーション能力を向上させるためには，相手を変えて継続的に学んでいくことが必要であると考えていることがわかった。

単元の終了時に，学習活動を通して生徒たちが気付いたことを記入したワークシートを確認すると，「意見の交換は大切」「コミュニケーションをとりながら、相談して行うと完成に近くなる」「人と違うことを思いついたらすぐにいう」「正しい知識がないとひらめきも出ないことに気づいた」「よいアイデアを出すことが大切」「失敗したことを報告する」などという意見が記入されていた。

生徒たちの話し合いの様子を観察すると，不具合が生じたときにグループ全員でその課題を共有しているところは，出来上がりも早かった。また，出来上がりのイメージがはっきりをしていることも，完成度に影響を与えていた。

以上のことから，生徒たちは試行錯誤しながらも課題を解決していく過程で，コミュニケーションをとりながら活動することの重要性に気づいたといえるだろう。

また，研究実施クラスで時間内に完成し，クラス全体に正四面体（正三角錐）や立方体の作り方を説明するプレゼンテーションを行った生徒たちは「人に説明することの難しさを知った」とワークシートに記入し，プレゼンテーションを聞いていた生徒たちは「人の説明を理解する難しさに気づいた」と記入していたことがとても興味深く感じた。そして「人に理解してもらうには，わかりやすく，具体的に，正確に伝えることが必要だと思った」「理解してもらうには語彙力が必要だと思った」という意見もあった。

5．研究のまとめ

課題解決に向けた話し合いの学習活動を通して，生徒たちは社会人として求められるコミュニケーション能力について理解を深めることができた。また，課題を解決するためには，話し合いながら試行錯誤を繰り返していくことが有効であることを，体験しながら学ぶことができた。そして，さらにコミュニケーション能力を高めるために、継続して学習する意欲を持つことができた。

6．今後の課題

多くの生徒はコミュニケーション能力を高めたいと強く願っており，自信を持ってコミュニケーションをとるために，今後も学習していきたいという意欲を持っている。例えば，今回の実践後のアンケートで「今回学んだことがコミュニケーション能力であることは理解できるが，これだけで社会人として求められるコミュニケーション能力が充分かどうかわからないから」と答えたり，「実際にコミュニケーションがうまくとれなかったから」と答えたりした生徒など，「理解できなかった」と答えた生徒も，コミュニケーションについて理解したいと前向きな意欲を示していると考える。従って，まずは，そもそも適切なコミュニケーションのとり方とは本質的にどういうことなのかを深く掘り下げてとらえ直したい。そして，社会に出てから予想される場面などを具体的にいくつか想定して適切なコミュニケーションのとり方を考え，ロールプレイをするなど，実際に話し合いの活動をし，このような活動をした上で，もしもできなかった時には，なぜ適切なコミュニケーションをとることができないのかを振り返って考えさせることを繰り返して，生徒の主体的な学習意欲を尊重しながら，今後も継続的に指導を重ねていきたい。

また，アンケートで「話し合いはできたが普段とあまり変わった感じがしなかったから，コミュニケーションをとることができたと実感できない」「課題に集中して話せなかったから」「１回の授業だけでは実感できなかったから」という回答もあったので，コミュニケーションをとる相

手を変えたり，話し合う時間を意識的に配分したりするなどの工夫も，継続的な指導の上で必要であると考える。

そのためにも国語科の授業だけでなく教科の枠を超えて連携し，インターンシップなどの実の場を活かすなど，指導の機会を多くすることも必要である。また，生徒が相手に話す際に，相手に聞いてもらうために話しているのだという意識が持てるように，相手を思いやる気持ちや豊かな心を育てることも重要であるといえるだろう。

このコミュニケーション能力の育成を目的とした学習をして卒業した生徒と卒業後に会ったときに，学校で勉強したので社会人になってもコミュニケーションをとることに自信を持つことができていると話してくれた。これは学校でコミュニケーション能力の育成をすることの重要性を示しているといえるだろう。

今後も生徒が自信をもって社会で活躍できる力を育てるため，課題の改善を図り，生徒一人ひとりに合わせた指導を継続していきたい。

引用文献

○文部科学省『高等学校学習指導要領　平成21年３月告示』文部科学省　2009年
○文部科学省『高等学校学習指導要領解説　国語編』教育出版株式会社　2010年
○国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校国語】』教育出版株式会社　2012年

参考文献

○㈱OJTソリューションズ『トヨタの問題解決』中経出版　2014年
○Ａ４用紙で作る正三角錐（正四面体）折り紙（2014年11月アクセス）
http://aaatoyo.com/download-a4-origami-regular-tetrahedron.htm
○Ａ４用紙で作る立方体折り紙（2014年11月アクセス）
http://aaatoyo.com/download-a4-origami-cube.htm
○経済産業省ＨＰ・社会人基礎力（2014年７月アクセス）
http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html

注

（１）　デュアルシステム：高校２年生の1年間，週１日受け入れ企業に通い実習する，就業体験や技術の伝承を目的とした授業で，希望者が参加する。
（２）　コミュニケーション講話：コミュニケーション能力の向上を目的とした学校行事で，主に挨拶の仕方などを中心とした講話を聞く。高校在学中に１回行われる。
（３）　グループ：各クラスとも，９～10グループを構成した。